

《地域力創造アドバイザー派遣》

きょうたんごし
京都府京丹後市「限界集落の再生・活性化」



地域力創造アドバイザー派遣

きょうたん ご し

京都府京丹後市「限界集落の再生・活性化」

地場産品のブランド化と空き家活用による農林業の振興と定住の促進

総務省地域力創造アドバイザーを活用した、 地域資源と住民が共に生きる集落の再生・活性化

ぽかぽかと穏やかに日が差し、透き通った湧き水がとことこと人知れず流れている。驚くほどの静けさは、都会の喧騒を忘れさせるほどだ。まちの中を歩けば、歴史ある古墳や神社、その地名は歴史を感じさせる。国内最高齢の男性、木村次郎右衛門さん(112歳)も、この地で日々穏やかに暮らしている。



しかし、利便性を求める人々は、次々にこの土地を離れていき、高齢化・過疎化の進む中山間地域は限界集落へ。その中には、居住者が1世帯となってしまうところもある。

そこへコーディネーターとして派遣された一人の男性。彼のアイデアは、“不可能”という壁をいかに乗り越えるか、につながり、“行動あるのみ”という信条は関わった多くの人に強い印象を与えた。彼が残していった種をもとに、刺激を受けた人々は、限界集落の再生・活性化に取り組んでいる。

果たして、彼が残していったものとは——？そして、地域の再生・活性化への取り組みとは——？

◆取り組み概要

●取り組みの目的

宇川流域の地域資源を活用することにより、限界集落等の再生・活性化を図る

●取り組みの内容

- ・「細川ガラシャ米ブランド化プロジェクト」：野間地域における米のブランド化
- ・「畑地区空き家活用定住促進プロジェクト」：上宇川地域（畑地区）における空き家を活用した移住者受け入れ

●取り組み主体

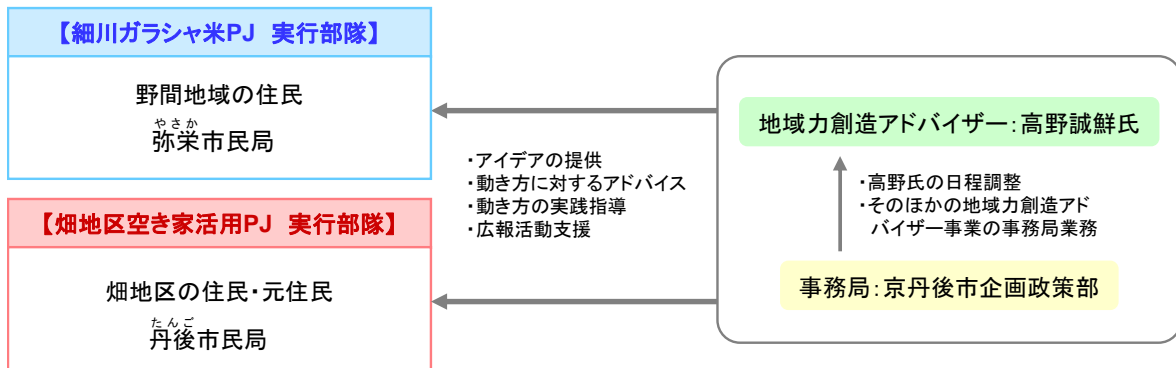
- ・野間地域・上宇川地域の集落住民
- ・地域力創造アドバイザー：高野誠鮮氏（2008年度のみ）
- ・京丹後市役所



地域力創造アドバイザーの紹介

高野誠鮮(たかのじょうせん)氏
羽咋市職員。羽咋市の限界集落を活性化させるため、ブランド米「神子原米」の開発、空き家を活用した定住促進、首都圏大学生との交流事業を実施。高齢化率54%の山村集落を3年間で50%に下げた実績を持つ。

◆取り組みの体制



◆取り組みのポイント

1. 「そこにしかないもの」という魅力付け

地域力創造アドバイザーのアイデア、動き方に対するアドバイスをもとに、美味しさ、安全安心、話題性、社会貢献という観点から、商品の付加価値を生み出し、ブランド化を狙った。

2. 移住者の地域定着までの支援

もとの集落住民との信頼関係の構築を重視し、彼らが納得できる移住者を選ぶことで、移住後の支援体制（移住者と集落住民の話し合いの場の設置等）づくりにつなげた。

3. メディアを徹底的に活用した情報発信

新聞社やテレビ局等のメディアリストを作成、プロジェクトの進捗があるたびに、直接情報を発信するとともに、インターネットを活用したより広い情報発信を行うことで、取り組みに対する注目度を高めた。

取り組みによる成果

- ・地域力創造アドバイザーにより集落の再生・活性化の土台ができ、ノウハウが伝わった
- ・市職員・集落住民の発想力・行動力をひきだした
- ・地域住民によるNPOの発足、大学生の参画等、地域づくりの新たなプレイヤーが登場した

今後の展望

- ・定住促進をにらんだ都市との継続的な交流による集落の再生・活性化
- ・地域全体への取り組みの拡大
- ・「水」を原点とした京丹後らしい活動への発展

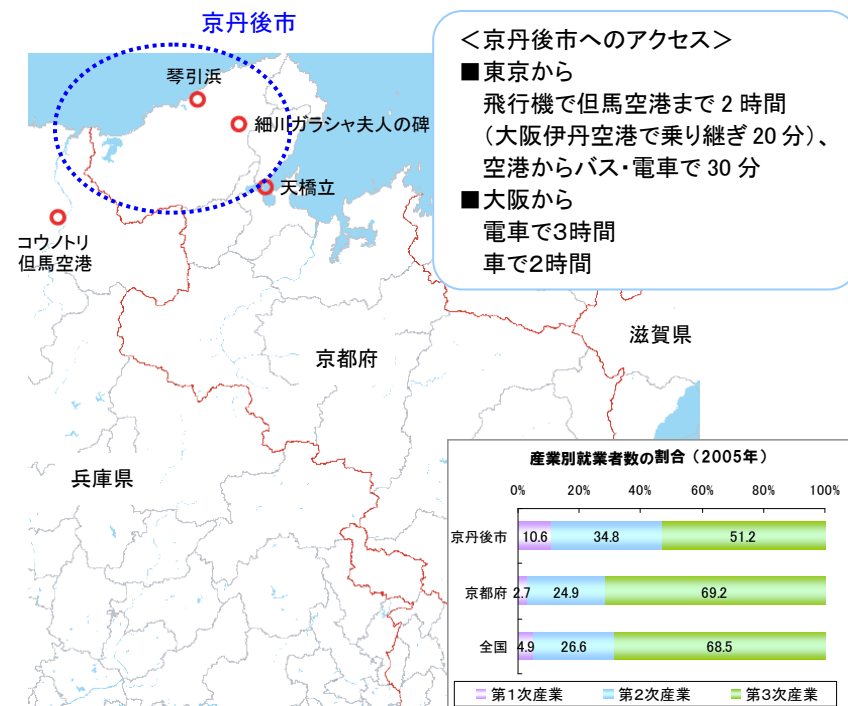
京丹後市の概況

人口減少、高齢化が著しい

京都府北部、丹後半島に位置する京丹後市、人口総数 62,723 人、一般世帯数 20,920 世帯（2005 年国勢調査）。1980 年以降、京都府、全国では人口が増加しているのに対し、京丹後市では減少の一途を辿っており、2005 年の人口は 1980 年の約 85% となっている。また、高齢化率も、京都府が 20.2% と全国並みであるのに対し、京丹後市は 28.0% と、高齢化が著しい。

主要産業は、農業、製造業、観光業

産業別の就業者数の割合を見ると、京都府や全国と比べて、第 1 次産業と第 2 次産業の割合が高くなっている。それぞれの内訳を見ると、第 1 次産業では農業、第 2 次産業では製造業の就業者数が多くなっている。これは、農業と繊維・機械金属工業が主要産業であるためであり、そのほか海産物や温泉を資源とする観光業も盛んである。



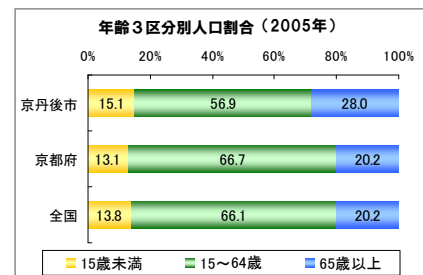
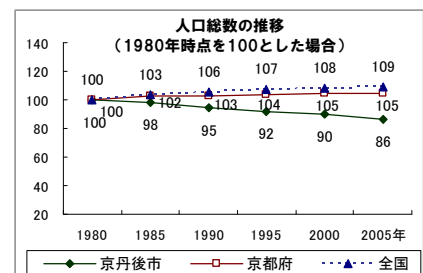
出典) 総務省統計局; 国勢調査
地図製造) 国際航業株式会社

取り組みに至る経緯

アドバイザー連携による限界集落の再生へ

近年、著しい過疎化・高齢化が進む山村集落、京丹後市においても、中山間地域の限界集落化が年々進行している。そんな中、2007 年 10 月に「全国水源の里シンポジウム」が綾部市で開催され、限界集落の再生に関して、問題意識の共有や取り組み事例の紹介等が行われた。これに出席していた京丹後市長、中山泰氏は、限界集落対策の必要性を強く認識、その命を受けて市では、農村、商工、生活福祉、建設の多分野にまたがる庁内の検討組織として「限界集落対策検討会議」を設置、取り組みの検討を始めた。

そんな中、総務省で始まったのが「地域力創造アドバイザー事業」である。総務省ホームページには、各地で地域活性化に活躍する地方公共団体職員や民間専門家を紹介している「地域人材ネット」がある。地域独自の魅力や価値の向上に取り組む市町村に対して、「地域人材ネット」登録者を「地域力創造アドバイザー」として派遣等を行い、モデル的に支援するものである。



出典) 総務省統計局; 国勢調査



当時の企画政策部の担当者が「地域人材ネット」にアクセスしたところ、そこに限界集落再生の実績をもつ人物がいた。それが高野誠鮮氏である。京丹後市は、市の抱える課題解決に向けて、同様のテーマで具体的な成果を出しているこの人物に頼みたいと強く願い、2008年4月、総務省の地域力創造アドバイザー事業に応募、そのビジョンが評価され選定された。

「宇川流域活性化戦略」の始まり

京丹後市に派遣された地域力創造アドバイザー高野誠鮮氏は、実は羽咋市1.5次産業振興室の現役の職員、2005年に創設された同室にて地域活性化に取り組み、独自の発想とノウハウで山村集落の高齢化率の減少に成功した実績を持つ。また、金沢大学の講師、妙法寺の副住職としての顔ももつ多才な人物である。

高野氏がまず着手したのは、限界集落等の再生・活性化を図るための戦略づくり。「宇川流域活性化戦略」と名づけられたこの計画は、さっそく庁内の検討組織である「限界集落対策検討会議」の委員や集落住民等に向けて提案された。

Point 実践的な戦略提案により集落住民を説得

高野氏の「宇川流域活性化戦略」の提案をきいた集落住民の岡本毅氏は、こう語っている。「若い頃から同じようなことをやりたと思っていました。でも、年を取るにつれてパワーがなくなっていた。高野さんの戦略は、血を騒がしてくれて、勢いをつけてもらった気がするよ。」このような住民の反応に対し、市職員は「高野氏の提案が実践的で説得力があったのではないか。」と分析。高野氏の提案が、自身の羽咋市での経験をもとにした実効性のある内容であったため、地域住民にとっても説得力があったと考えられる。

この時に高野氏から提案された実施対策は、①メディアの活用、②地域ビジネスの創出、③都市との交流の展開。これをもとに、豊かな水資源やそれを基盤とした米づくりを活用した取り組みをしたいという市の思いと、高野氏の現場視察による取り組みの実効性の検討をふまえ、宇川流域に位置する野間地域と上宇川地域の2つのプロジェクトが生み出された。野間地域は弥栄市民局、上宇川地域は丹後市民局の担当職員があたった。



野間地域住民

おかもとつよし
岡本 毅 氏



「天の恵み ガラシャ」の生産者。昔から化学肥料に頼らない農法を実践してきた。高野氏との出会いをきっかけに気持ちが再燃した。

「昔からのお付き合いを大切に」

Q. 羽咋市の視察研修に参加してどうでしたか？

自分が 30 代の時に考えていたことを、すでに実行されていて、すごいと思いました。あそこでは、30 代の人たちが実際に動いている。今まで努力が足りなかったのかなと思いました。

Q. 地域力創造アドバイザー事業を終えてどうですか？

これから高野さんに仕掛けてもらったことを実施していかななくてはいけない。「天の恵み ガラシャ」については、有機農法に対する私たちの考えを、いかに伝えていくかが重要だと思います。それには、宣伝費を使うよりも、昔からお付き合いのある消費者との関係を継続していくことで、輪を広げていきたい。方法は模索中ですが、昔からやりたかったことですし、私は楽しんでやっているので、しんどいという思いはないですよ。

現在の取り組み

「宇川流域活性化戦略」は、野間地域における米のブランド化、上宇川地域における定住促進を目的に空き家活用の2つのプロジェクトから成っている。地域力創造アドバイザー派遣事業は原則単年度のため、2008 年度で終了し、現在は地域主体で取り組まれている。

【野間地域】

細川ガラシャ米ブランド化プロジェクト

野間地域は農村地区、古来より米の栽培が行われてきた。京丹後地域で生産されるコシヒカリは、財団法人日本穀物検定協会が実施する米の食味ランキングでも 2007 年、2008 年と 2 年連続最高評価の特 A ランクを獲得している。そこで、この米に着目し、これをブランド化することにより、農家所得の向上を図る戦略とした。2008 年度は、高野氏からのアドバイスを受けながら、「天の恵み ガラシャ」米の商品開発と PR 活動を平行して進め、年内に販売開始までこぎつけた。2009 年度からは、引き続き PR 活動を進めるとともに、生産体制の強化・規模拡大に取り組んでいる。

【上宇川地域】

畑地区空き家活用定住促進プロジェクト

上宇川地域では過疎化・高齢化が進み、空き家が増加していることから、これを活用して移住希望者の受け入れを行うこととなった。畑地区は、集落人口が 1 世帯 3 人となっていたことから、まずはこの地区で移住・定住制度のモデルをつくることとなった。2008 年度は、畑地区を存続させるために自治会長となって集落を牽引してくれる移住者を、報道発表や市のホームページ、田舎ぐらしや移住希望者応援サイト等で募集し、地元住民等とお見合いの場として現地説明会を開催、その後、選考を行い、1 世帯の受け入れが決まった。これにより、募集～説明会～選考までの仕組みができたことから、現在は、このモデルをもとに、さらなる移住希望者の受け入れに向け、空き家の改修や生活環境の整備を進めている。また、移住者が集落になじめるよう、もとの集落住民との交流機会をもつ等の支援を行っている。



↑「天の恵み ガラシャ」の
パッケージ、デザインも試
行錯誤しながらすべて手
作りで行った。



↑細川ガラシャ隠棲の地
(京丹後市弥栄町須川小
字味土野)にある細川ガ
ラシャの碑

出典)京丹後市 HP(2010/03/26 参照)

<http://www.city.kyotango.kyoto.jp/miryoku/tokusanhin/gratia/index.html>

←「天の恵み ガラシャ」は、7反のみで生産されている希少な米。
この美しい環境を見れば、食味ランキング特 A という美味しさも
納得だ。冷めても美味しい。
市ホームページで購入可能 (精米 2kg 1900 円)

<http://www.city.kyotango.kyoto.jp/miryoku/tokusanhin/gratia/index.html#a03>

(2010/1/7 参照)

取り組みのポイント

【野間地域】

「そこにしかないもの」という魅力付け

野間地域のブランド化プロジェクトで驚くべきことは、約3ヶ月でブランド米の商品開発を行ったことである。商品をブランド化するためには、商品の付加価値を生み出す様々な仕掛けが必要である。高野氏は、自身がプロデュースした羽咋市の神子原^{みこはらまい}米のブランド化戦略を参考に、美味しさ、安全安心、話題性、社会貢献という観点から、次々に商品の付加価値を生み出していった。

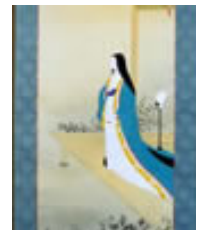
美味しさや安全安心については、有機肥料と低農薬で米を栽培している農家の米を対象とし、商用の人口衛星を活用した米の食味測定、土壌養分の測定、農業用水の水質検査を行った。また、京丹後市は、細川忠興夫人隠棲の地であったことから、その洗礼名にちなみ、米の名前を「天の恵みガラシャ」と名づけ、話題性を生み出した。商品のパッケージには、細川ガラシャの子孫である細川護熙^{ほそかわちひろ}元首相の奥様、細川佳代子^{ほそかわかよこ}氏が商品名を書き入れた。さらに、商品を購入すると、その収益の一部が、細川氏が理事を務める認定 NPO 法人「世界の子どもにワクチンを日本委員会

(JCV)」の寄付に回るようにすることで、社会貢献を考えた商品とした。さらに、細川ガラシャがキリシタンだったことから、バチカン大使館を訪問、ローマ教皇に「天の恵み ガラシャ」20kg を献上し、これも話題をよんだ。

これらの仕掛けにおいて共通するのは「そこにしかないもの」という魅力である。これがブランド米としての付加価値につながり、「天の恵み ガラシャ」というブランドが誕生したのである。商品開発にあたっては、高野氏が考案したアイデアをもとに市職員が動いたが、具体的な動き方が分からない場合には高野氏がアドバイスをしたり、自らやってみせることもあったという。

細川ガラシャとは？

細川ガラシャは、戦国武将明智光秀の娘、玉(たま)で、1578年に細川忠興と結婚。1582年、父明智光秀が本能寺で織田信長を討ち、自らも滅んだことで「逆臣の娘」となった玉を、夫細川忠興は1584年までの約2年間丹後半島の山深い村三戸野(現京丹後市内)に隠した。三戸野で暮らすうち、玉はキリスト教に救いを求め、後にガラシャの洗礼名を授かった。



出典)京丹後市 HP(2010/03/26 参照)

<http://www.city.kyotango.kyoto.jp/miryoku/tokusanhin/gratia/index.html>



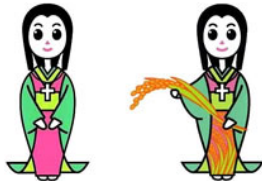
目の前には棚田、空き家と農地はセットで提供される。



畑地区の様子。驚くほど静かな環境。

Point

野間地域キャラクター「ガラシャ」



「天の恵み ガラシャ」の開発で、もう一つ力を入れたのが、野間地域キャラクター「ガラシャ」の募集である。「公募ガイド」(コンテスト情報を掲載している公募情報誌)を用いて全国から募集し、1ヶ月弱の間に応募総数 77 点が集まった。選考は、取り組みを地域に広く知ってもらうために、各町の地域行事の投票ブースで9点に絞込み、次に野間地域の文化祭で3点に絞り込んだ。最終的には市長、細川佳代子氏を含む選考委員会で決定した。「天の恵み ガラシャ」のパッケージにも使われている。この「ガラシャ」、稲を持っているが、他にも野菜を持たせたり、蕎麦をもたせたりと、今後の米以外の商品のブランド化に対応できるデザインとなっているのがポイントである。

出典)京丹後市 HP(2010/03/26 参照)

<http://www.city.kyotango.kyoto.jp/miryoku/tokusanhin/gratia/index.html>

問い合わせは海外を含む様々な地域から数十件あったが、現地説明会に参加したのは6組、そこから、集落住民、畑区出身者の会、市職員で選考した。畑地区には農地はあるが、農業で生計が立てられる環境ではないため、条件としては、手に職をつけている人としたが、高野氏のアドバイスをもとに、最終的には集落住民が納得できる人を選んだ。

市職員いわく、このときに集落住民と畑区出身者の会のメンバーの方に選んでもらったことが重要だったという。というのも実際に一緒に住むことになるのは集落住民、移住者が地域になじむということは彼らとの信頼関係をつくるということでもある。移住後は、市が、移住者と集落住民の話し合いの場を設けたり、交流する行事を企画したりと、関係づくりのための支援を行っている。集落住民が主体となって選んだからこそ、こうした後々の支援体制をつくれたのだと言える。

【上宇川地域】

移住者の地域定着までの支援

上宇川地域の定住促進プロジェクトでは、2008年10月の移住希望者の募集開始から現地説明会を経て、2009年3月に移住者が決定した。

【野間地域】【上宇川地域】

メディアを徹底的に活用した情報発信

2つのプロジェクトを進める中で、高野氏が徹底したのがメディアの活用である。プラスになると現場が判断すれば、積極的に話題提供に応じ、

常に情報を発信するよう心がけた。

具体的には、市職員の中で広報担当を決め、情報を発信する新聞社やテレビ局等のメディアのリストを作成した。2つのプロジェクトに進捗があるたびに、これらのメディアに直接 FAX で情報を発信していった。また、ただ情報を発信するだけでなく、その内容も重視した。高野氏いわく「人がくいつくような」情報発信、定住促進プロジェクトで、単に「移住希望者」を募集するのではなく、「おーい、誰か自治会長をやってくれませんか？」と投げかけているのも、その一つである。これには、市職員は大変苦労したと言う。

この結果、多くの新聞やテレビ等でプロジェクトの内容が取り上げられ、2008年度のみで報道発表数は11回にのぼった。また、市ホームページ等インターネットによる情報発信も行った。

これにより、『『天の恵み ガラシャ』を買いたい』『畑地区に移住したい』という問い合わせが多数寄せられ、担当者が注目度の高まりを実感できたという。また、畑地区については、海外からの問い合わせもあった。新聞やテレビ等による報道は、どうしても地域版が多かったため、インターネットの活用により、広く情報発信できたのである。



↑ 畑地区移住者現地説明会のテレビ取材
野間地域でも、細川佳代子氏の協力が決まった段階、商品名が決まった段階等、プロジェクトの進捗があるたびに情報を発信した。新聞では、朝日・産経・毎日・京都新聞の京都版のほか、読売新聞の総合版でも掲載された。

出典)京丹後市資料

取り組みの成果

高野氏による集落再生の土台づくり

2008年度は、市民局（京丹後市の支所）と集落住民が実行部隊となり、ここに高野氏が関わってアドバイスやアイデアを提供していた。この後方支援として、市の本庁・企画政策部が高野氏の日程調整やプロジェクトの広報活動を行っていた。2009年度からは、高野氏の手を離れ、集落住民と市職員のみで試行錯誤しながらも主体的に活動を展開している。

市職員と集落住民は、2008年度の取り組みについて、「基本的な流れができた」と振り返る。また、市職員にとっては、他業務にも活用できるノウハウとして、メディアを活用した情報発信を習得できたことも一つの収穫だったそうだ。高野氏の支援により築いた土台をもとに、彼らだけで動かしていつている。

報道資料

おーい 誰か自治会長をやってくれませんか？
丹後町 畑地区 自治会長（区長）を全国募集
～のどかな山村で新たなスタートを切ってみませんか～

平成20年10月10日
丹後町 畑地区
畑地区出身者の会
京丹後市役所

かつては十数戸あった集落が、過疎・高齢化の進行により1世帯3人にまで減ってしまった丹後町・畑地区において、この地に移住し、自立自立に挑戦しながら自治会長（区長）として頑張っている方を全国から募集します。

条件が厳しくとも、この場所だからこそ成り立つ生活スタイル、また、ビジネスや経済活動が必要ありません。

今回は、この地で何らかのビジネスや経済活動を営みながら、集落の一員となり、消滅の危機に陥っている集落を救ってくださる方を募集します。

あなたの方で集落を再生・活性化させてみませんか。



畑地区の風景(南を向いて撮影)



畑地区の風景(西を向いて撮影)

↑ インパクトにこだわった畑地区の移住希望者の募集。「おーい、誰か自治会長をやってくれませんか？」というフレーズが印象的

出典)京丹後市 HP(2010/03/26 参照)

http://www.city.kyotango.kyoto.jp/shisei/shicho/kishakaiken/200804_200903/index.html



山・川・海はすべてつながっている。
これらを守り育てていくことが、住民、市職員の
共通の想いである。



↑ 間人(たいざ)ガニ
松葉ガニの中でも、間人漁港で水揚げされ厳選されたもので、水揚げ量が少ないことから“幻のカニ”とも言われている。
漁場まで30kmと近く、日帰り漁が可能のため、鮮度の良さは抜群。肉厚でとろりととろけそうな食感を求めて多くの食通が訪れる。
出典)京丹後市 HP(2010/03/26 参照)
<http://www.city.kyotango.kyoto.jp/cms/kanko/spot/tokusanhin/index.html#a02>

市職員・集落住民の意識の変化

高野氏が残していったものは、土台やノウハウだけではなく、「実践あるのみ」という高野氏の信条。これが市職員や集落住民に大きな意識の変化をもたらした。高野氏に関わった職員や住民が

皆口をそろえて言うのが、「やってみれば動くものだな」という感想。特に市職員は、やるべき方向性が分かっているにもかかわらず、どう動いていいのかわからず停滞することも多々あったが、そのたびに、高野氏に尻を叩かれていたようだ。「おかげで動く体制ができた」と市職員は語っている。



弥栄市民局主任(細川ガラシャ米
ブランド化プロジェクト担当)
おだにかずひろ
小谷和広 氏



京丹後の自然を愛してやまない。他の市職員も知らないような自然スポットをいくつも紹介してくれた。運転テクニクにも見られる豪快さで、野間地域を牽引する。

『川』を守りながら活性化したい

Q. 高野氏のアドバイスで、どんな変化がありましたか？

発想も大胆に、行動もすぐ起こせるようになりました。また、いろいろな人を巻き込んでネットワークを形成する、交流するということも積極的にできるようになりました。「天の恵み ガラシャ」を積極的に情報発信したことが、地域内でつながるきっかけになることもあります。

Q. 今後、取り組みを進める上で、どんなことを大切にされたいですか？

やはり「川」を大切にしたい。山と海をつないでいる川を守りながら活性化していきたい。この水は、魚沼にだって全く負けていないですよ。「天の恵み ガラシャ」が生産されている美しい環境をぜひ見てほしい。そのためのホームページも作成中です。最近、よく聞く洪水被害ですが、山や田の管理放棄で森の水源涵養機能(降水を貯留し洪水を緩和する機能)が低下しているのが原因の一つです。この美しい環境を守るために、そういうことも多くの人に知ってほしいですね。

地域づくりの新たなプレイヤーの登場

高野氏は、2008年度に、集落住民等を対象に羽咋市の視察研修を行っていた。羽咋市の農山村集落活性化の取り組み事例を実際に見学するものである。この研修の参加者を含む集落住民で、2009年4月に発足したのが、地域づくりNPO。彼らは、市民局とともに、地域づくりを実行していく組織として立ち上げられた。このように、波及効果として、地域づくりの新たなプレイヤーも登場している。

新たなプレイヤーといえば、大学生もまた然りである。2008年度から参画した同志社大学の大学院生をはじめ、現在は同大学や京都建築大学校等の学生がフィールドワークをかねてアイデア出しや観光拠点整備の手伝いをしている。受け入れ役の集落住民は、「これまであまり積極的でなかった住民も、大学生には喜んで話をするようです。媒体になって輪が広がっていけば。」(岡本氏)、「自分たちの錯覚に気づかせてくれます。いい刺激になっていますよ。」(羽賀氏)と期待している。大学生の参画は、新たなプレイヤーの登場ということ以上の意味をもちそうだ。



野間地域住民

はがよしまさ
羽賀義昌 氏



岡本氏とともに、野間地域活性化グループをつくり、集落再生に取り組んでいる。お酒を介した学生とのコミュニケーションはお手の物。

「発想は夢物語からだっていい」

Q. 初めて「宇川流域活性化戦略」を聞いたときは、どんな感想を持ちましたか？

次元が違うと思いました。細川ガラシャとか、細川佳代子さんにコンタクトをとるとか。そんな発想は全くありませんでした。でも、実際には実現したわけで、やってみれば動くもんだなと思いました。発想は夢物語からでもいいんだって、考え方が一歩も二歩も大きくなりました。

Q. 取り組みの中での学生との交流はどうですか？

私たちには錯覚が多いんですよ。若い頃はこうだったと書いていても、実際に学生と話してみると、全然ポイントが違っていたりします。ですから、彼らと真剣に話をするのは貴重な機会になっています。本音を出してくれるのは、たくさん酒のピンが空いた後ですけどね(笑)。彼らにはすごくいい刺激をもらっています。やはり地域を若返らせるためには、新しい血が必要ですね。僕らが一緒に楽しいと感じたり、面白いと感じる中で、彼らが課題や可能性を見つけてくれたらうれしいと思っています。

Q. 今年度に入って自立した取り組みを展開する上で、必要なことは何ですか？

昨年度の地域力創造アドバイザー事業で、高野さんには基本的な流れをつくってもらいました。めまぐるしい一年が終わって、今は自分たちで着実に進めていくための体制をつくる時期だと思っています。昨年度は米を外へ向けて販売しましたが、今後は人を呼び寄せる材料にしていきたい。他にも、美しい自然景観や、今掘り起こしを行っている奥の深い歴史資源、これらはすべて人を呼び込む資源になる。それらを提供する拠点やそれらに関する情報を一元的に発信する拠点を整備していきたいです。また、それを大学生とつくっていくことで、将来的に彼らが地域に根付いてくれることを期待しています。

今後の展望

都市との継続的な交流に向けた新たな展開

ブランド米の開発と空き家を活用した定住促進により、限界集落の再生・活性化に取り組み始めた京丹後市。彼らが次に目指すのは、「都市との継続的な交流」である。

「やはり新たな血を入れないといけないんです。」と語るのは集落住民の羽賀氏。ブランド米等の特産品が売れば、地域は対価を得ることができる。しかし、実際に生産している農家の年齢は50～70代、高齢化という現実からは逃れられないのである。また、有機肥料、低農薬というのは大変手間がかかる。量も多くは栽培できず、流通させるのにはまだまだ課題がある。そこで、現在取り組み始めているのが、定住促進をにらんだ都市との交流である。

これまでの観光の取り組みと異なるのは、「生活の見える交流」だという点。お目当ての観光施設まで一直線に移動するのではなく、その途中で住民の生活を感じてもらう。そのための拠点として、農産物直売所、農家カフェ、農家民宿、間伐材を利用したログハウス等を整備し始めている。もちろん直売所には、「天の恵み ガラシャ」をおき、その他にも「ガラシャシリーズ」として商品を開発していきたいと考えているそうだ。

これらの拠点からは住民の生活が垣間見える。住民が普段食べているもの、生活している場所、これらを資源として活用することで、イベント的に住民を疲れさせていたこれまでの交流から、住民そのものが評価される、訪れる方も迎える方も楽しい継続的な交流への発展を図る。



丹後市民局局長(畑地区空き家活用定住促進プロジェクト担当)

あずまかずひこ
東和彦氏



住民との挨拶を欠かさない。移動の最中も、住民を見かけては声をかけていた。公務員らしからぬ「カウンター越しでないコミュニケーション」の実践者

「住民と一緒にいる公務員が一番幸せ」

Q. 今後、自立して取り組みを進めるために必要なことは何ですか？

職員の意識改革です。職員全体のレベルアップを図りたい。公務員らしからぬ民間の感性を持った公務員が増えればと思います。取り組みを進めれば、トラブルや問題は当然起こります。それを避けるために理屈をたてて、行動するのを避けていたら物事は前に進みません。現実の環境を認めて、そこでできることを考える。そうやって問題を乗り越えていくことを楽しめるようであれば、それから上司と部下の関係も大切。上司には、部下に思う存分やらせて、責任はとってやるという心構えが必要です。

Q. 地域づくりに取り組む上で大事にされていることは何ですか？

民意を把握できるネットワークをいかに形成するかということです。先生って言うのは地域にたくさんいるんですよ。住民の皆さんです。私もこれまでたくさんの方の話を聞いてもらいました。住民と一緒にいる公務員が一番幸せだと思いますよ。



↑ 地元の人のみぞ知る湧き水、この土地の人の原点である。
飲むと驚くほどやわらかい。この水で入れたお茶やコーヒーは格別だ。



← 水がきれいな地域で間違いなく美味しいのが蕎麦。
野間地域では、昔から蕎麦栽培も行われており、自家製麺の蕎麦も楽しめる。
本わさびをすって食べる蕎麦は香り高く弾力があり絶品

地域全体への取り組みの拡大

市職員と集落住民の取り組みとして展開してきた2つのプロジェクト、しかし、参画している集落住民は全体のごく一部でしかない。今後の新たな展開に向け、いかに取り組みを地域全体に広げていくか。そのための方向性を市職員に聞いた。

「積極的に声をかけていって取り組みに対する理解を得ていくことが重要です。また、現在の取り組みをモデルとして位置づけ、成功させていけば後はついてくると考えています。ゆくゆくは、交流拠点を運営しながら仲間を広げ、まちづくり法人をつくるなり、専従で取り組む人がいる体制をつくりたい。」周囲に理解を求めていくことで、取り組みに賛同し参画する人を増やしていく、さらに将来的には、取り組みの体制づくりも視野に入れているようだ。

「水」を原点とした京丹後らしい活動へ

高野氏により、限界集落の再生・活性化の土台がつけられ、新たなプレーヤーが登場する中で、京丹後市の取り組みは自らが考える活性化の方向へ向かいつつある。

市職員、集落住民の誰もが共通して語っていたのが、「水」への思いである。地域資源を活用した取り組み、その基盤となる豊かな自然環境、原点となる水を大切にしたいという思いがある。その背景には、「宇川流域活性化戦略」で提案された、地域資源を利用するのではなく、win-winとなるように活用するという高野氏の考えが息づいている。

豊かな自然環境、それを基盤に生み出される農産物、海産物、そして奥深い歴史資源、これらは京丹後市にしかない資源である。豊かな発想力と行動力を身につけた彼らなら、これらの資源を守り活かしながら、京丹後らしい魅力を発信していくことだろう。